

特集Ⅱ

夜から昼にうつる  
—ライフステージの移行にともなうつながりの分化と家族像—

Transferring from Night Club Lady to Daytime Worker or Housewife:  
Differentiation of Girl's Relationship in Transferring Life-stage and Family Image

打越 正行 (沖縄国際大学 南島文化研究所)

【概要】

本稿は、2007年に暴走族の見物をするギャラリーとして活動していた非安定層にあたる女の子たちの、その後10年にわたる移行研究である。

当時、10代後半だった彼女たちは、キャバクラで働きながら、頻繁に深夜の公道で暴走族見物をしてきた。夜の時間帯に働き、活動していた彼女たちは、現在、育児や仕事で昼の生活に移った。夜から昼にうつることは、単に仕事と生活の時間の変更ではなく、夜シフトから昼の仕事への変化であり、生活や人間関係を組み替えることであった。それは、生活の基盤もないまま、定位家族から生殖家族へとうつることであった。この移行過程について考察することが本稿の目的である。

そしてこの移行において、彼女たちは主に2つの困難に直面した。1つ、さまざまな困難を緩和・無化してきた女子つながりが、ライフコースを移行するにあたり分化し、アクセス困難となっていたこと。2つ、そのような彼女たちは、出生家族からも少ない資本しか継承せずに、新しい家族を作り上げざるをえず、そこでは自身が抱く家族像に依拠しながら同棲の形を経て、家族をつくった。

彼女たちは、自身の描く家族像にもとづいて、使える資源を総動員し同棲の形を整え、家族をつくりあげた。このように彼女たちの文脈に沿い、一つひとつの行為の理解を積み上げていくことに社会学の課題がある。

キーワード：女の子、移行研究、家族

1 女の子たちの移行

本稿は2007年に、暴走族の見物をするギャラリーとして活動していた女の子たちの、その後10年にわたる移行研究である<sup>1)</sup>。その当時、10代後半だった彼女たちは、キャバクラで働いていた。そして深夜のゴーパチ(国道58号線)で、毎晩のように暴走族見物をしてきた。このように夜に働き、夜に活動していた彼女たちは、現在、子育てや仕事で昼の生活に移った。この夜から昼にうつる過程の困難さについてまずおさえる。そして、その状況で彼女たちが生活と家族をつくりあげていった過程を描く。

彼女たちは夜から昼にうつった。この変化は、単純に「成功」した事例ではない。彼女たちが夜に働き活動していた理由は合理的であった。またその後昼に移ったことにも同じく合理的であった。合理的であるとは、自らとは異なる他者の「不合理」にみえる行為を、その行為の動機を行為者の諸関係や文脈や状況に置き直して、我々が了解可能であるということである(岸、2016:31)。以下では、その時々を選択された行為の合理性を描き、その変遷の過程を追う。

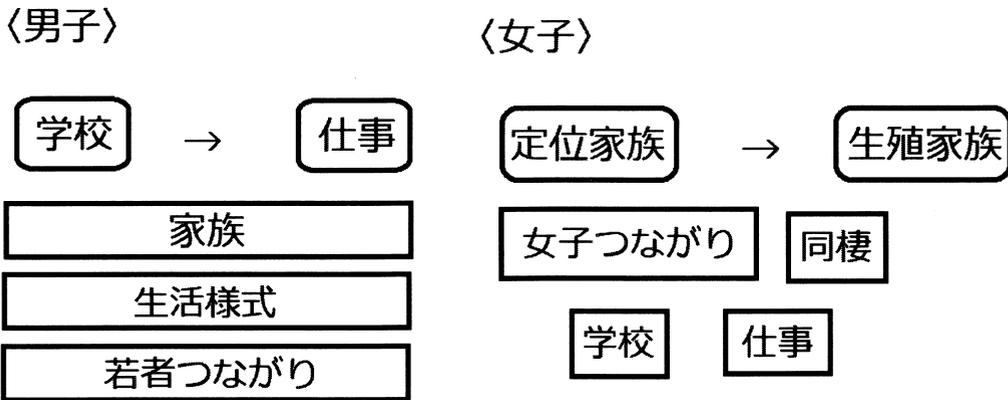
これまでの移行研究は、学校から仕事への過程を扱うものが中心であった。カルチュラル・スタディーズの名著である、ウィリスの『ハマータウンの野郎ども』は、移行研究としても重要な研究成果といえる。ウィリスは学校に反抗的な態度をとる「野郎ども」が親と同じく工場労働者となる過程で、文化の役割が大きいことを指摘した(Willis 1977=1996)。また国内では、学校からフリーターに移行する過程をおった、新谷周平の研究がある(新谷 2002)。どちらも調査対象者の若者がその仕事を選択することが合理的に理解できる形で描かれている。野郎どもは学校で身に付けた反学校文化が、工場における労働者文化と適合的であることから、

野郎どもが工場労働者になる過程を描いた。新谷は学校から路上に出てストリートダンサーとして活動する若者が形成した地元つながり文化(時間, 場所, 金銭の共有)が, フリーターの働き方と適格的であることから, 彼らがフリーターとなる過程を説明した。これらの研究は, 特定の階級や集団に固有のサブカルチャーを身に付けることで, 学校からそれぞれの仕事へ移行する過程の説明を試みたものである。

これらの研究は, 文化的側面から移行を説明した点で重要であるが, 家族の役割は表立って描かれていない。ウィリスが描いた野郎どもは学校の反学校文化と工場の労働者文化と親和的な家族の生活基盤があった。また新谷の描いたダンサーたちも地元つながり文化を支える家族からの金銭的支えがあった。男の子たちの学校から仕事への移行過程には, 文化だけでなく家族やそこでの生活の存在が大きく支えとなっている(図1)。

これらに対して, 本稿でとりあげる沖縄の女の子たちは, 生まれ育った定位家族からパートナーと築く生殖家族への移行を経験する。学校や仕事は彼女たちの移行過程においていっとき使える資源ではあっても, それがベースとなったり, 行きつく先ではない。このように彼女たちの移行は男の子と比較して不安定である。彼女たちは女の子のつながりにもとづいて学校から夜の仕事や活動にうつる選択をしたうえで, その後に家族像にもとづいて昼の生活に移り家族をつくる。このように, 男の子と女の子の移行過程は大きく異なるものである。以下では, このように男の子とは異なる, 女の子たちの移行過程を描く。

図1 男子と女子の移行過程



※ この図は下層若者の男女別の移行過程を示したものである。沖縄の男の子は, 家族, 生活様式, 若者つながりの基盤がすべて安定することはまれである。

## 2 調査対象・方法・概要

ここではまず本稿の調査対象である女の子たちについて紹介する(下記表1)。そして調査の手順と概要について説明する。

表1 女の子グループのプロフィール

名前	年齢 (2007年)	出身	学歴	定位家族	生殖家族	仕事 (2016年)
サキ	16歳	沖縄県北部	高卒 (1年留年)	父親(自営業) 母親(パート) 姉2人、兄	夫(鳶) 子ども(4人)	保険営業
エミ	16歳	沖縄県南部 (H中)	高卒	父親(無職) 母親(介護職) 兄、弟	夫(自動車修理工) 子ども(1人)	事務
真里	16歳	沖縄県中部	高卒	父親(公務員) 母親(事務) 弟	シングルマザー 子ども(1人)	保険営業
ユウ	16歳	沖縄県南部 (H中)	中卒	祖母と二人暮らし	不明	キャバクラ

サキ<sup>2)</sup>は、沖縄県北部で生まれ育った女の子である。父親は自営業、母親はスーパーのパートをしていた。4人きょうだいの末っ子である。1年に1度は家族で旅行に行ったことを思い出として話してくれた。中学の時に付き合った彼氏は4歳上の18歳だったが、窃盗で捕まり少年院に行ってしまった。高校2年の時、当時の彼氏との子どもを出産し、入籍した。高校は1年休学し育児に専念したため、4年かけて卒業した<sup>3)</sup>。高校在学中の出産と育児の間にキャバクラで働いていた。私は、この頃のサキにゴーパチで出会った。彼女は「いつか、結婚式あげたいな」と深夜のコンビニ駐車場でつぶやいていた。

エミは、沖縄県南部で生まれ育った女の子である。父親は無職で母親は介護の仕事をしている。父親はパチンコに通い、家では母親とのけんかが絶えなかった。中学の頃はギャルになり、繁華街のストリートで過ごしていた。彼女は高校に進学すると、夜のゴーパチでギャラリーを始めた。その時期、半年ほど週に数日のペースでキャバクラに勤務していた。バイクが好きで、貯めたお金で購入した。「将来は主婦しながら、レジ打ちで働きたい。けどサンエーは嫌。かねひでが気楽でいい<sup>4)</sup>」と話していた。

2人は同級生ではあるが、生まれ育った地元は異なる。この他にも、中部出身でキセツ帰りの真里や、エミと同じ中学出身でキャバクラ嬢のユウなども顔を出していた。このグループは、最初はそれぞれが暴走族見物をしてきたが、いつも同じ場所で暴走族見物する他の女子のギャラリーにエミが声をかけた。また知り合いに紹介してもらったりして構成された。また彼女たちは見物だけでなく、サキは当時の彼氏のバイクの後ろに乗り、エミはバイクを買ってツーリング<sup>5)</sup>にも参加していた。バイクという共通の趣味でつながったグループで、2007年頃、サキとエミはほぼ毎晩ゴーパチに出ていた。

筆者が彼女たちのグループに最初に声をかけたのは、2007年10月である。その前から、沖縄で暴走族やヤンキーの若者への調査をはじめた私は、特定の少年らと談笑したり、行動をとるようになるようになっていた。そんな時に、ある暴走族の若者が私に、コンビニの駐車場で暴走族見物をしてきた彼女たちに声をかけて来るように指示した。これは10代の少年らが先輩たちにやらされる「通過儀礼」のひとつであった。私はあっさり無視されて立ち去るつもりで形式的に話しかけた。

— こんばんは一、バイク見に来たの？

サキ うん。この前、浦添いたよね？

— おおー、なんで知ってるの？毎日いるよ。あん時、自分らもいたの？

サキ うん、けどあの日(暴走族の盛り上がり)が)いまいちだったよねえ。

— えっ、すごかったじゃん。

サキ 台数も少なかったし、特攻(服)着てなかったでしょ。

— まあ、けど(公道を)逆走してたよ。

サキ そんなの普通だよ。<sup>6)</sup>

意外にも彼女たちは親切に対応してくれた。そのような対応となったのは、まず私が毎晩、ゴーパチに来ていることを見てくれていたためである。私は暴走族、ヤンキーの若者に自分のことを覚えてもらうために、いつも同じジャンパーを着ていた。それにより、彼女たちが警戒する私服警官や風俗業のスカウトではないことが、伝わっていた。また、サキ、エミともに、間接的に私のことを知っていた。後にわかったことだが、サキの当時の旦那に私は何度か話を聞いていた。またエミの先輩のレディースチーム（女の子の暴走族）に、私は調査を行っていた。

いつも見ていることと間接的に知っていることによって、この女の子グループへの調査は可能となった。私がバイクで追いかけてながら、男の子たちへの調査をしていると、彼女たちはバイクの乗り方が下手なことをおもしろがってくれた。その後も毎年のように、一緒に暴走族見物をしたり、旧盆のエイサーを見てまわったりと調査を重ねることができた。サキとエミについては、それぞれ生活史インタビューを実施した（下記表 2）。なお、2012 年からは、共同研究者の上間陽子も、この調査に加わっている。

表2 生活史インタビュー調査一覧

調査対象者	調査日時	調査場所	インタビュアー
エミ	2014年8月	ファミリーレストラン	打越、上間
サキ	2016年3月	ファーストフード店	上間
エミ	2016年9月	タコス料理店	上間

### 3 夜から昼にうつる

2007年、サキとエミたちの女の子グループは、夜のゴーパチでギャラリーをし、キャバクラで働いていた。サキとエミには、夜にゴーパチに集い、夜に働く理由があった。またそこから昼の生活に移るには、彼女たちにとっての家族像が強くきいていた。

#### 3.1 「家族で旅行にでかける」という家族像——サキの場合

サキは2007年当時、妊娠7カ月の女子高生だった。2年間付き合った男性と1年前に入籍していた。そのような状況で、ほぼ毎晩ゴーパチに来て暴走族見物をしていた。

—— 今日もギャラリーしにきたの？

サキ 旦那とケンカしてからに、家にいたらわじわじ（イライラ）するからよ。あいつ（旦那）はキャバクラに飲みに行ってるばーよ。死に（とても）むかつく。

—— だいたい何時までギャラリーしてんの？

サキ 3時か4時までかな。

—— 遅いねー、大丈夫なの、お腹（の子ども）は？

サキ たぶんよ。

—— それで、何時に起きるの？

サキ 昼かな、けどすごいんだよ、こんなでも毎朝お弁当作ってるからね。

この時、サキは旦那がキャバクラに通うことに苛立ち、ゴーパチに来ていると話していた。しかし2013年の聞き取りでは、彼女は妊娠中にゴーパチに出ていたのは、彼からの激しいDVがあったためであることを打ち明けた。

上間 殴る系？

サキ 殴ったりー、階段から落とされたりー。

上間 え——っ。

サキ いちよ（一応）、ひどい。結構。馬乗りもされたし、首も締められたし。だから一応、トラウマはある。だから今の旦那とケンカしても、トラウマはある。この人大丈夫かなあ？殴ってこないかなあ？みたいな。

上間 んんん。

サキ 結構ひどかったではある。あの人は。

上間 どんなやって逃げたの？逃げたっていうのか。

サキ いや、自分。一緒に住んでる時は、普通に、相手が酒飲んでて、ケンカなって殴り始めるんですよ。ケンカなったら絶対。酒飲んでから。だから、ひどい時は警察呼んだりとか。

サキは警察に通報したものの、その後、彼をゆるした。

サキ だから、自分最初は一、子どももいるし、やっぱ帰ろうっていうアレ（気持ち）があるんですよ。（DVを）やられても一、ちょっとしたら帰る気になるんですよ。要は依存？依存があるんですよ。多分。男の方に。だから、依存して帰ってきたりはしてたんだけど、何かが吹っ切れて一。

上間 なんてだろうね。

サキ なんてだろうねえ。

上間 もういいって思ったときってのは、赤ちゃん連れてって殴られたとき？

サキ そうっすね。それが大きいかも一番は。なんでか内容は忘れたけど、なんかでケンカして一、マジ馬乗りされて、隣に赤ちゃん寝てるのに、こんなされたらマジ嫌やっさーと思って、そっこ一逃げたんすよ。でもう、これ離婚の原因っすね。子どもの前でやるくらいなら、自分一人で育てた方がいいと思っ一。

サキは子どもとの生活を考えて、彼との生活をやり直そうとした。彼女がキャバクラに勤めていたのは、暴力やケンカを避けるためだけではなく。彼女は暴力をふるう夫との生活に直面し、夫の収入とは別の収入を確保する必要がある。彼との生活が終わった後の保険として、融通の利くキャバクラの収入をへそくりにまわしていた。

しかし、彼女は赤ちゃんが隣にいる状況で再びDVにあった。子どもに殴る姿をみせる彼との家族は、彼女がみてきて、そして思い描く家族とはかけ離れていた。この時、サキはこの男性は子どもが生まれても変わらないことを知った。彼に見切りをつけ、2人は離婚した。その後、旦那は、釣りやキャバクラなどの趣味への出費がかさみ、養育費は数カ月で途絶えた。

2011年、サキはかつてから知っていた暴走族の後輩と付き合い、自身の子ども2人を含めた4人での同棲生活を始めていた。彼女は「2回目の結婚は、慎重になる」と話し、同棲生活は2年を超えた。彼女が特に慎重になったのは、男性の仕事の稼ごとDVの可能性についてだった。あらゆる場面で年齢による上下関係が幅を利かせる彼・彼女たちの文化では、彼が年下であったことがサキにとっては大事なポイントだった。

同棲期間中に、彼はかつての暴走行為で警察から出頭するよう連絡が入った。彼はサキに正直に自らの過ちを告げ、謝り、そして出頭した。警察でも正直にすべてを話し、二拘留（約20日）で家に帰った。これをきっかけに、彼は暴走族を引退し、鳶として働くことを、サキに誓った。彼女は「(彼氏に)最近(仕事)を休まさん、休んだら1日責めたてる。夜も飲みに行かせない」と徹底的に働きかけた。

そして自らも、建築現場で弁当販売の売り子のパートを始めた。私が型枠解体業で参与観察していた時、サキに「解体屋とか、セメン(ト)の枠はずすだけだろ。しかも、どうせ、おまえ(打越)はPコン(単純作業のひとつ)だろ」とばかにされたことがある。彼女は建築業のなかでの型枠解体屋や鳶の地位、そしてPコンがそのなかでも単純作業で賃金の低い新米のやる仕事であること、そして鳶の賃金の伸び率や独立の見込みについて調べていた。ある年の夏祭りでは、私は彼女が子育てをしながら働いていることを称賛した。するとサキは「えらいとか

じゃないばーよ。子どもがいるのに働くのが当たり前だばーよ」といい、諭された。このように旦那をしっかり働かせると同時に、自らも家事とパートを徹底的にこなした。彼女は、彼との生活をつくりあげること懸命だった。そして 2013 年、彼と入籍し、その直後に彼との子どもを出産した。

サキは当時を振り返る。

サキ 家族がいるってことの幸せが今 (2014 年) わかりました。前の結婚の時は何もわからなかったけど、今はぜんぜん、家族ってこういうもんなんだって幸せ感がありますね。

……

サキ やっぱ、旅行とか、旦那とふたりで行きたいですね。

上間 (旅行が) 好きなんだねー。

サキ そうっすね。(子どもが生まれてから) オートバイに乗れないから、趣味がなくなって、旅行いくのが楽しいっていうあれ(趣味)ができてしまって。一応、自分の親が旅行好きなんですよ。1年に1, 2回は行くんですよ。東京とか大阪とか。

上間 へえー。

サキ だから自分も結構行ってるんですよ。家族で。だからあんなの見てるから。

暴力をふるう元旦那と離婚に踏み切り、その後の生活をつくる過程で実家に駆け込むことができたこと、そしてこの「旅行に出かける」という家族像は指針となった。家族で旅行に出かけることは、サキにとって両親から受け継いだ家族像だった。彼女は、このような家族像に依拠し、現在の旦那と家族をつくりあげた。

### 3.2 教訓としての家族像——エミの場合

2007年、エミは女子高生だった。毎日のようにサキたちとゴーパチで暴走族見物をしていた。彼女にゴーパチにきた理由について聞いた。

エミ (ゴーパチに来るのは) バイク乗りの男がいいからよ(笑)。

—— 彼氏はバイクに乗ってたの？

エミ 最近(彼氏との関係が)終わったし(笑)。

—— そうなんだ。

エミ まじめな男がいい。一途な男ね。

—— 元彼はまじめじゃなかったの？

エミ あーあ…、男は浮気すんだよ、結局(笑)。

……

エミ 私たち、ほんと男運ないよね。ユウなんて2個上(2歳年上)の男と付き合っ、(その男性が)不倫だったんだよ。1年以上付き合ったけど、不倫だっばれてから別れてるし。

—— エミは？

エミ 男が金(を)持ってく。

—— いくらよ？

エミ 5万以上持ってかれた。会うたび持ってかれる。そのために呼び出されるみたいな。

—— マジだよ？

エミ けど、金よりデートドタキャン(直前に中止)はマジへこむ(本当につらい)。巻き髪して待ってたのにじらあ(笑)。

……

ユウ そんなの、まだまし、私なんて彼氏の誕生日にプレゼント買ってケーキ買って待ってたのに、他の女とカラオケ行ってたってよ。

— お金の貸し借りもあるの？

ユウ 私なんて、1回に10万だよ。返ってきたことがない。ぶっち（音信不通に）されたし。

エミは深夜のゴーパチで、恋愛やその失敗した経験をユウたちと共有し笑い飛ばしていた。このグループで暴走族を見物しながら、つらい経験を共有し、笑い飛ばすことで、目の前の現実をなかつたことにしようとしていた。またこのつながりで夜シゴトの情報や、職業訓練校に通えば就職できるといううわさが共有されていた。このように、彼女たちにとって、このグループは、情緒的な基盤であり、具体的で有用な手立てを共有する機能も果たしていた。

その後、エミは高校を卒業して、求人誌でみつけたアパレル業でアルバイトを始めた。接客業に興味があったエミは、お客さんへの声のかけ方などを積極的に学び、やりがいをもって働いていた。ただ650円でスタートした時給は、2年半働いても20円しか上がらなかった。上司からバイトリーダーになることを打診されたものの、昇進すれば少し条件が上がるだけで、ほぼ毎日残業させられることがわかっていたために断った。

ちょうどそのころ、彼女は所有するバイクの塗装を知り合いの先輩にお願いした。その先輩の悠馬とバイクについて話し込むうちに、2人の交際は始まった。悠馬は元暴走族の若者で、バイクの塗装を自前でこなすほどの腕の持ち主であった。自動車工場の修理工として働く彼は、いつか得意な塗装で独立するという夢をもっていた。エミは悠馬と同棲をはじめ、彼の夢を一緒にかなえたいと思うようになった。

エミはすぐに行動にでた。時給の上がないアパレル業を辞め、職業訓練校に入り経理を勉強した。またコールセンターで働きながら自動車保険の仕組みを習得し、その後は整備工場で働きながら陸運局の手続きの手順を教わった。彼との夢に着実に近づいていた時、彼女は妊娠した。ただしこの時点では彼の仕事は独立に踏み切れず、そのために入籍も遅らせている状態だった。出産は見送らざるをえなかった。

エミ 最近(1カ月前)子どもおろしたわけさ。ゆうに病院教えてもらって行ってきた。

上間 悠馬さんに言ってある？

エミ あ、言ってます。今はもう、エミが無理って言ったからおろしたんだけど。一応、彼は「産んでもいいよ」って言ったけど。

— うんうん。

エミ エミがまだだなみたいな。

— ああほんとに。

エミ (彼を)親にも紹介してないし、まだ1年も住んでないみたいな。

上間 うんうんうん。これでバーンって結婚とかなるのが、ちょっと違うなって思ったの？

エミ うん。うん。

……

エミ うちの親は、多分「産め」っていう親だから。

— 産めって？

エミ 「産め」っていう親。だから(親には)言えないわけ。

悠馬は出産に前向きであった。またエミの両親も産むことに前向きな返事を見込めた。ただ、エミは悠馬との入籍、そして出産に慎重だった<sup>8)</sup>。その理由について、エミは以下のように話す。

エミ お母さん、(家族生活が)ほんとにきついはず。で、お父さん働かないでいつも遊んでるから。

— お父さんギャンブルも？

エミ お父さん(ギャンブル)してる。パチンコよく行くから。ダメ男だよ。んはは。だから、(私は)お父さん見てるし、前の彼氏からもこんなお金とかよくとられてたから、金銭感覚ダメな人が嫌だから。

上間 うんうん。

エミ 今の彼氏はまともに仕事してるから、ちょっと安心してる。

エミは、自身の生まれ育った家族での父親の姿と自身の失恋の経験から、結婚相手の「金銭感覚」を重視していた。悠馬との生活を始めて5年近くになるが、彼女は欠かすことなく家計簿をつけている。入籍と出産に慎重であったのは、そのようなかつての家族の経験から、「避けるべき家族」のイメージを抱いていたことが大きかった。エミはケンカばかりする両親の家を飛び出し、夜のゴーパチに出た。ただし自身も父親と重なる「ダメ男」にだまされた。これらの経験を反面教師とし、彼女は「金銭感覚」を備えた男性にこだわった。そして、悠馬が独立できるために、自身もできる限りのことをすすめた。その結果、2015年に悠馬は塗装工場に転職し、エミは悠馬と入籍した。その後、すぐにエミは妊娠し出産した。

#### 4 家族像から同棲、そして家族へ

2007年からの10年間にわたる、サキとエミが経験したことや生じた出来事を見た。以下では、女子つながりと家族像に焦点をあてて、この10年間で簡単に振り返る。そして、彼女たちが家族をつくる過程について考察する。

##### 4.1 女子つながりの分化と家族像

サキとエミの10年間でまとめたのが以下の表3である。サキは旦那からのDVで、逃げるように家を出て、夜のゴーパチに集い、離婚後の生計をまもるため夜シゴトに就いた。エミもけんかの絶えない両親たちとの家を出て、夜の女の子たちグループとの時間に情緒的な安定を求めていた。当時の彼女たちは女子グループにアクセスすることで、情緒的な安定や情報や経験などを共有することができた。このように彼女たちが夜の仕事に就き、ゴーパチに集うことには、彼女たちなりの理由があった。

しかしサキとエミが困難に直面した時期、互いに相談することはかなわなかった。サキがDVにあっていた時、エミはアパレルの仕事に夢中だった。エミが出産を回避した時、サキは再婚し妊娠中だった。互いにすれ違い、また昼にうつるなかで、夜シゴトを続けるユウとも離れていた。ゴーパチでつくりあげた女の子のグループは、この時に互いにアクセスできなかった。彼女たちがライフステージを重ねていく過程で、女子つながりは分化した。

サキはDVをきっかけに、エミは悠馬との出会いをきっかけに、それぞれが将来展望を描こうとした。サキは激しいDVからゴーパチに避難し、その後、徐々に生活や新しい彼氏との家族を作り上げようとした。この過程で「家族で旅行に行く」という家族像は指針となった。エミはかつての父親や自身の失恋をもとに「避けるべき家族」を教訓として、悠馬との独立の夢にむけ邁進した。ふたりの夜から昼への移行過程で、家族像は大きな役割を果たした。サキにとっては肯定的なものとして、エミにとっては否定的なものとしてではあったが、常にそこに立ち返るイメージとして存在した。ふたりの家族像は、幼少期から身体に刻み込まれたもので、ふたりはそれにもとづいて家族をつくらうとした。

表3 サキとエミの記録

	サキ	エミ
2006年 15歳(中3)	年上の彼氏と交際 ゴーパチでギャラリー	ゴーパチでギャラリー
2007年 16歳(高1) 打越調査開始	ゴーパチでギャラリー	ゴーパチでギャラリー 繁華街でギャル
2008年 17歳(高2)	彼氏と入籍 旦那からDV 第1子(男)出産 キャバクラ勤務 ゴーパチでギャラリー	キャバクラ勤務 ゴーパチでギャラリー
2009年 18歳(高3)	妊娠中で高校休学 キャバクラ勤務 ゴーパチでギャラリー	キャバクラ勤務 ゴーパチでギャラリー
2010年 19歳	高校4年目 第2子(女)出産 旦那は本土で仕事 DVが原因で離婚 弁当屋(1年半働く)	キャバクラ勤務 ゴーパチでギャラリー バイク購入
2011年 20歳	実家近くでアパートを借りて生活 (兄と親が世話) 弁当屋 新しい彼氏と同棲	キャバクラ勤務 ゴーパチでギャラリー
2012年 21歳 上間調査開始	アパートで彼氏と2人の子どもと同棲 職業訓練校に行く(半年間、パソコン) 弁当屋	アパレル店勤務 悠馬と交際開始
2013年 22歳	彼氏の職場近くに引越し 彼氏と2人の子どもと同棲 彼氏は現役暴走族(逮捕後、引退)	悠馬と交際中 アパレル店勤務
2014年 23歳	妊娠中	アパレル店勤務 職業訓練校 悠馬と同棲 出産回避
2015年 24歳	同棲していた彼と入籍 第3子出産	悠馬と同棲 自動車修理工場勤務(1年間)
2016年 25歳	育児休暇 弁当屋復帰	悠馬と同棲 自動車保険会社のコールセンター勤務
2017年 26歳	育児	悠馬と入籍
2018年 27歳	育児 保険会社勤務	妊娠中 第1子出産・育児

#### 4.2 家族像を具現化する——同棲から家族形成へ

イメージである家族像から具体的な家族をつくるために、彼女たちはまず同棲の手順をふんだ。この過程をおさえるために上間陽子の議論を参考にする。上間は、沖縄の暴力やネグレクトなどの家族における困難を経験した女性たちが、自らの家族をつくること、そして子どもを軸とした生活の意味に注目する。そして全面的に自分に依存し絶えず手間と時間をかけないと生存すらおぼつかない子どもの存在に、彼女たちは積極的な意味を見出していることを調査デ

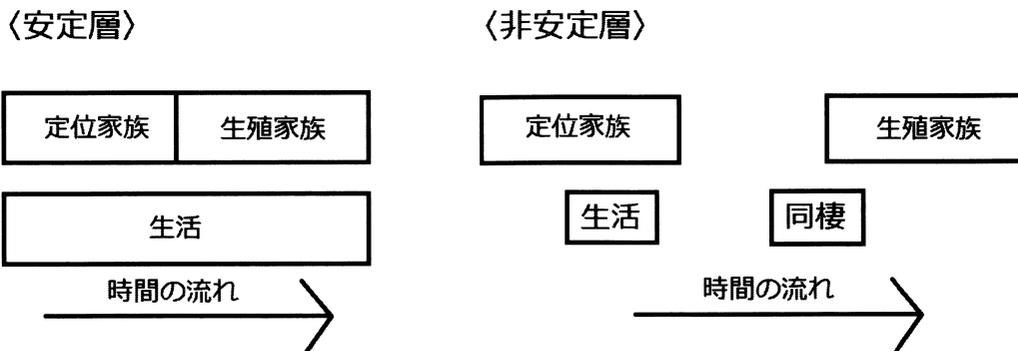
一タに基づき指摘する。それは「子どもを生かそうとし、子どもを育てようとする日々のなかで、彼女たちはかつて自分を育てたであろう家族との記憶をたどろうとする(上間, 2017: 121)」ためと説明される<sup>9)</sup>。

本稿のサキは新しい家族を築くにあたって子どもを出産した。またエミは悠馬の独立が落ち着き、将来の生活が見通せるようになってから入籍と出産に踏み切った。これらのケースも、子どもをケアすることが基軸として、新しい家族の足場を固めようとするものである。これは上間の描いた子どもを中心に家族をつくろうとする女性たちと重なる。

他方で彼女たちの家族のつくり方は、安定層のやり方とは大きく異なるものだった(図2)。安定層の場合、家族は生活の基盤そのものである。定位家族で生まれた女性が生殖家族へと移る際、親からの金銭や文化資本を引き継ぐことが比較的容易である。特に文化資本は生活を通じて親から子へ継承されるため、この安定した基盤は重要である。ゆえに安定層で、子どもをケアすることは、少なくとも家族をつくりあげるためだけになされるものではない。

他方で非安定層である中間層(自営業、サービス業)の家族では、定位家族の生活は生殖家族の基盤とは異なるものである。サキにとって生殖家族は「家族で旅行」に行くことを目指したものの、それは当分かなわないものであった。エミは父親とは異なる適切な「金銭感覚」をもった男性を主とする家族をつくろうとした。このように彼女たちにとって、定位家族と生殖家族は不連続であり、自らつくりあげていくものであった。サキとエミはその都度に、家族のあり方をチェックし、軌道修正し、どうしようもない場合は切り捨てた。彼女たちは定位家族から継承する金銭的支援も少なかった。文化資本はサキに関しては家族旅行に行く場面では確認できる程度で、エミに関しては反面教師として継承するに過ぎなかった。また女の子つながりによる社会関係資本も分化し、機能不全となっていた。

図2 安定層と非安定層の女の子の移行過程



彼女たちは法的、制度的な家族をつくる前に同棲の形をとった。その際の指針として家族像の役割は大きかった。そしてこの家族像は、往々にして既存の価値規範やイデオロギーの形をとっていた。

サキが元旦那に毎日弁当を作っていたことは、ここでは家父長制による抑圧とみるより、たとえば彼女があらゆるものを用いて同棲の形を整えようとする営みとみる。なぜなら、彼女たちの困難は、イデオロギーによってある特定の形へと収斂されることではなく、家族の形が定まらないことにあるためだ。

このようにみると、イデオロギー批判は家族が生活の基盤になっている主に安定層の場合に限定された議論であることがわかる。定位家族で生まれた女の子へと引き継ぐ文化資本に近代家族イデオロギーが埋め込まれており、それが既存の家族のあり方を無批判に再生産し、実際には多様な家族のあり方を抑圧していることへの批判であり、それは有効な批判である。しか

しサキとエミのケースを読み解く際に、その議論をそのまま当てはめることできない。彼女たちもさまざまなイデオロギーから自由ではないが、彼女たちにとって、家族はそれらを押し付けられた結果ではなく、具体的に自身で作り上げるものである。

このように彼女たちの困難は家族をつくること、その形が定まらないことにある。そしてその不安定さは暴力の問題と結びつきうるものであった。彼女たちがつくりあげる家族は、子どもをケアする基盤でもあり、同時に暴力の温床でもあった。夜にでることは、定位家族や不安定な生殖家族から抜け出ることである。またその後、昼にうつることは、自らの家族像を同棲しながら具現化し、安定した生殖家族をつくることである。

このような状況で、サキはDVをふるう元夫によく子どもの世話をさせた。これは彼にケアすることの自覚を促す働きかけだった。彼女たちが同棲の形を整える際には既存の価値規範やイデオロギーを用いるが、この過程で暴力を伴わない形へと修正が施されている。それは「あなたは家族の大黒柱なのだから、家族を殴っている場合じゃないよ」というメッセージであった。

社会学は彼女たちが懸命につくりあげる家族を前近代的で間違っただけのものとし、奪ってしまうのではなく、彼女たちが既存の価値規範やイデオロギーをより使いやすなものへと修正し組み合わせている過程に見て取れる彼女たちの実践をこそつかまなければならない。彼女たちは、困難に直面すると家族像に立ち返り、使える資源を総動員し同棲の形を整え、家族をつくらうとした。このような営みを記述し、彼女たちの文脈でその行為の理解を積み重ねること、これが社会学の課題である。

[注]

- 1) かつて筆者は、生活不安定層の若者、なかでも女の子の貧困の再生産過程を扱った『排除する社会・排除に抗する学校 (西田, 2012)』を批判的にレビューした (宮内ほか, 2015)。本稿は、その論考の実証編にあたる。
- 2) 本文中の人物などの名称は、すべて仮名である。また本人が特定されないように人物に関する情報は、一部で変更を施している。
- 3) サキは子どもたちの保育所入所の手続きのために役所を訪ねた。窓口では、入所希望者は既に定員を超えていたため入所は難しいと言われた。担当者に自身の状況を冷静に伝えたが、「できる限り配慮する」という煮え切らない応答を繰り返された。その対応から、彼女は入所できないのだと思い込み、自身の現状をすべてぶちまけて帰宅した。入所はあきらめていたが、後日、役所から入所許可の書類が届いた。彼女は「やってみるもんだね」と話した。  
市役所で自身の大変な状況が大変だと伝えることは、簡単なことではない。そもそも大変な状況を周囲に訴えて、より深刻になったり惨めな気持ちになる経験をした者は、次から訴えようとしなくなる。高校生の彼女が、妊娠した時に教師たちは彼女が復学し卒業できるように体制を整えた。彼女が大変な時に周囲に打ち明けることで支援を受けた経験は、その後、彼女が役所に向かい訴える基盤となった。
- 4) かねひでもサンエーも、ともに沖縄のスーパーである。かねひでは高校生のバイトや主婦のパートが多く、サンエーは大学生や正社員が多い。
- 5) ツーリングとは、平日の夜や週末の日中に、旧車會といわれ暴走族を引退した若者を中心にバイクを運転して楽しむことである。暴走行為と異なり、ツーリングは服装もカジュアルで、交通法規はほぼ守って運転する。
- 6) ( ) は、打越による補足である。また――は、打越による発話である。
- 7) この時、サキは自分の腕に子どもの名前をタトゥーを彫った。目の前の子どもを中心に、ひとりで生活を立て直す。そんな彼女の覚悟が腕に刻まれた。彼女はキャバクラで自分の腕を隠すことなく、堂々と接客した。接客業のキャバクラでは、通常、タトゥーを隠すような服装が奨励される。またシングルマザーであることは、積極的にオープンにされない。しかし、サキのほかにも子どもの名前が彫られた腕を隠すことなく働いているキャバクラ嬢は多い。それは彼女たちの生き方を表すもののようにみえた。
- 8) エミが出産を回避したことは、彼女のまわりの女の子からみると際立っていた。まわりの女の子たちは、そのような場合に多くが出産に踏み切った。そして上間が描くような子どもを中心とした家族をつくらうとする。エミが家族をつくってから出産したことについては、出生家族の存在が大きかった。それにより、彼女は周囲の女の子たちとの文化圏で行われている早婚と若年出産などを回避した。
- 9) しかし困難を抱えた女の子が、家族の記憶をたどり子どもを育てることは、「奇跡」というべき出来事である。それゆ

えに、上間はそのようなケアをする人をケアする必要があると述べる。

[文献]

- 新谷周平, 2002, 「ストリートダンスからフリーターへ——進路選択のプロセスと下位文化の影響力」『教育社会学研究』71: 151-70.
- 岸政彦・石岡丈昇・丸山里美, 2016, 『質的社会調査の方法——他者の合理性の理解社会学』有斐閣.
- 岡野八代, 2011, 「ケア, 平等, そして正義をめぐる」エヴァ・フェダー・キティ編『ケアの倫理からはじめる正義論——支えあう平等』白澤社.
- 宮内洋・松宮朝・新藤慶・石岡丈昇・打越正行, 2015, 「貧困調査のクリティーク(2)——『排除する社会・排除に抗する学校』から考える」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』122: 49-91.
- 西田芳正, 2012, 『排除する社会・排除に抗する学校』大阪大学出版会.
- 打越正行・上間陽子, 2012, 「沖縄地方におけるジェンダー格差」日本子どもを守る会編『子ども白書2012』草土文化, 159-160.
- 上間陽子, 2017, 『裸足で逃げる——沖縄の夜の街の少女たち』太田出版.
- , 2017, 「家族をつくる——沖縄のふたつの女性の調査から」『現代思想(エスノグラフィ)』2017年11月号, 青土社, 112-122.
- Willis, Paul E., 1977, *Learning to Labour: How Working Class Kids Get Working Class Jobs*, Ashgate Publishing.  
(=1996, 熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども——学校への反抗, 労働への順応』筑摩書房.)
- 山田昌弘, 1994, 『近代家族のゆくえ——家族と愛情のパラドックス』新曜社.

[付記]

本研究はJSPS 科研費 JP26780300 の助成を受けたものです。また共同研究者の上間陽子氏、松宮明氏、新藤慶氏からは、有益な質問とコメントをいただいた。そして本稿で登場する女の子たちは快く調査に協力してくれた。感謝申し上げます。